

4/23 Sat.

第246回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.246 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

4/24 Sun.

第246回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.246 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Special Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
チェロ
Cello
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ベートーヴェン
BEETHOVEN

〔休憩〕
[Intermission]

ベルリオーズ
BERLIOZ

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.6
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

周防亮介 -p.9
RYOSUKE SUHO

遠藤真理 (読響ソロ) -p.9
MARI ENDO (YNSO Solo)

小林亜矢乃 -p.10
AYANO KOBAYASHI

小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

三重協奏曲 ハ長調 作品56 [約36分] -p.13
Concerto for Violin, Cello, and Piano in C major, op. 56
I. Allegro
II. Largo
III. Rondo alla polacca

幻想交響曲 作品14 [約55分] -p.14
Symphonie fantastique, op. 14
I. 夢と情熱
II. 舞踏会
III. 野の情景
IV. 断頭台への行進
V. ワルブルギスの夜の夢

5/19 Thu.

第651回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.651 / Suntory Hall 19:00

指揮
Honorary Guest Conductor
フルート
Flute
コンサートマスター
Concertmaster

ヴォーン＝ウィリアムズ
VAUGHAN WILLIAMS

尾高尚忠
HISATADA OTAKA

〔休憩〕
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

尾高忠明 (名誉客演指揮者) -p.7
TADAAKI OTAKA

フリスト・ドブリノヴ (読響首席) -p.10
HRISTO DOBRINOV (YNSO Principal)

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

タリスの主題による幻想曲 [約15分] -p.15
Fantasia on a Theme by Thomas Tallis

フルート小協奏曲 作品30a [約18分] -p.16
Concertino pour Flûte et Orchestre, op.30a
I. Allegro con spirito
II. Lento – III. Molto vivace

交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] -p.17
Symphony No. 5 in E minor, op. 64
I. Andante – Allegro con anima
II. Andante cantabile, con alcuna licenza
III. Valse : Allegro moderato
IV. Finale : Andante maestoso – Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

5/24 Tue.

第617回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.617 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ソプラノ
Soprano
少年合唱
Boys Choir
コンサートマスター
Concertmaster

ウェーベルン
WEBERN

ベルク
BERG

[休憩]
[Intermission]

ツェムリンスキー
ZEMLINSKY

上岡敏之 *-p.8*
TOSHIYUKI KAMIOKA
森谷真理 *-p.11*
MARI MORIYA
TOKYO FM 少年合唱団 *-p.22*
TOKYO FM Boys Choir
長原幸太
KOTA NAGAHARA

6つの小品 作品6 (1928年版) [約13分] *-p.19*
6 Pieces for Orchestra, op. 6 (1928 version)
I. Langsam
II. Bewegt
III. Mässig
IV. Sehr mässig
V. Sehr Langsam
VI. Langsam

歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章 [約20分] *-p.20*
3 Bruchstücke aus "Wozzeck"
I. 第1幕 第2場&第3場
II. 第3幕 第1場
III. 第3幕 第4場&第5場

交響詩〈人魚姫〉 [約46分] *-p.23*
Die Seejungfrau
I. Sehr mässig bewegt
II. Sehr bewegt, rauschend
III. Sehr gedehnt, mit schmerzvollem Ausdruck

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

5/28 Sat.

第247回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.247 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

5/29 Sun.

第247回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.247 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

6/1 Wed.

非破壊検査 Presents 第32回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.32, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

上岡敏之 *-p.8*
TOSHIYUKI KAMIOKA
レナ・ノイダウアー *-p.11*
LENA NEUDAUER
長原幸太
KOTA NAGAHARA

序曲〈ルイ・ブラス〉作品95 [約7分] *-p.24*
"Ruy Blas" Overture, op. 95

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] *-p.25*
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

交響曲 第6番 口短調 作品74〈悲愴〉 [約46分] *-p.26*
Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"
I. Adagio – Allegro non troppo
II. Allegro con grazia
III. Allegro molto vivace
IV. Finale : Adagio lamentoso

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 (5/28、29)
特別協賛：非破壊検査株式会社 (6/1)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会 (5/28、29)
協力：コジマ・コンサートマネジメント (6/1)
※5月28日公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

4/23
土曜マチネー

4/24
日曜マチネー

Maestro

指揮

小林研一郎
(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

悪魔が躍る狂乱の
フィナーレ、
コバケンが一音一音に
魂を込める!



©読響

熱い音楽作りで絶大な人気を誇る“炎のマエストロ”。82歳を迎え、ますます円熟を深める世界的指揮者が、大太鼓や鐘が鳴り響く〈幻想交響曲〉とベートーヴェンの型破りな〈三重協奏曲〉を振り、会場を熱狂へと誘う。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダベスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号、そして20年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を授与された。国内では11年に文化庁長官表彰受賞、13年に旭日中綬章を受章、21年3月に恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九響名誉客演指揮者、名古屋フィル桂冠指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学、リスト音楽院の名誉教授などを務めている。オクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリースしている。

指揮

尾高忠明
(名誉客演指揮者)

TADAAKI OTAKA, Honorary Guest Conductor

名匠が熟達した指揮で
力強いサウンドを響かせる



©読響

国内外の名だたるオーケストラと共演を重ねる日本を代表する名匠。父・尚忠の作品とチャイコフスキーの名曲に熱い想いを込める。

1947年鎌倉生まれ。桐朋学園大学、ウィーン国立アカデミーで学んだ後、東京フィル常任指揮者(74~91年/現・桂冠指揮者)に就任。BBCウェールズ響首席指揮者(87~95年/現・桂冠指揮者)を務め、エルガーやブリテンなどのイギリス音楽を手がけた。

読響では92~98年に第6代常任指揮者を務め、数々の名演を生み、現在は名誉客演指揮者の地位にある。札幌響音楽監督(2004~15年/現・名誉音楽監督)、メルボルン響首席客演指揮者(10~12年)、新国立劇場オペラ芸術監督(10~14年)を歴任。現在は大阪フィル音楽監督、N響正指揮者、紀尾井ホール室内管桂冠名誉指揮者、21年から「東京国際音楽コンクール〈指揮〉」審査委員長などを務めている。国内の主要オーケストラのほか、ロンドン響、BBC響、バーミンガム市響、ベルリン放送響、フランクフルト放送響など世界各地の楽団に客演。大英勲章CBE、英国エルガー協会から日本人初のエルガー・メダルなどを授与される。サントリー音楽賞をはじめ、有馬賞(N響)、北海道文化賞、関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、JXTG音楽賞洋楽部門本賞など受賞多数。昨年秋の叙勲では、旭日小綬章が授与された。また後進の指導にも力を入れ、東京芸術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授を務めている。

5/19
名曲

Maestro

5/24
定期

5/28
土曜マチネー

5/29
日曜マチネー

6/1
大阪定期

Maestro

指揮

上岡敏之

TOSHIYUKI KAMIOKA, Conductor



©武藤章

約6年ぶりに読響の指揮台へ！
鬼才・上岡が
〈人魚姫〉〈悲愴〉を
劇的なドラマへと昇華させる

欧州を中心に活躍する鬼才が、遂に一時帰国。強烈な個性と独特のグルーヴ感で、ベルクやツェムリンスキー、チャイコフスキー作品の高まる激情を露わにする。

東京生まれ。東京芸術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。ロータリー国際奨学生としてハンブルク音楽大学に留学、クラウスペーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペティートルおよびカペルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。

これまでに、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィル首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場音楽総監督、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントなどの要職を務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、好評を博した。2016/17年シーズンよりコペンハーゲン・フィル首席指揮者を務めており、ケルン放送響、バンベルク響、バイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響などに客演している。日本では読響のほか、N響、新日本フィルなどと共演を重ね、16年から21年8月まで新日本フィルの音楽監督を務めた。ホテルオークラ音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞・特別賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

読響とは1998年の客演以降、2001、03、04、06、08、09、12、13、15年と共演を重ね、ベートーヴェン、ブラームス、R. シュトラウス、マーラーなどを指揮。またピアニストとしても活躍し、読響アンサンブル・シリーズにも度々登場。5月31日にも二度の延期を乗り越え、特別演奏会「上岡敏之の室内楽」を開催する。



©TAKUMI JUN

ヴァイオリン

周防亮介

RYOSUKE SUHO, Violin

豊かな歌心と温かな音色で魅了する読響が誇る名手。2017年4月から読響ソロ・チェロ奏者を務めている。東京芸術大学を卒業後、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学を修了。日本音楽コンクール第1位、「プラハの春」国際コンクール第3位など受賞多数。齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。これまでにG. ボッセ、J=P. ヴァレーズ、モロロー、小林研一郎、山田和樹らの指揮でウィーン室内管、プラハ響、都響などと共演。ドイツ・キームガウ春の音楽祭、神戸国際芸術祭で室内楽奏者としても国際的に活躍している。録音は、ソロ・アルバムのほか、小林研一郎指揮、読響との「ドヴォルザーク：チェロ協奏曲」をエイベックス・クラシックスからリリース。20年3月までNHK-FM「きらクラ！」のパーソナリティとしても人気を博した。

2016年ヴィエニャフスキ国際コンクールに入賞、審査員特別賞を受賞し、注目を集める新鋭ヴァイオリニスト。日本音楽コンクールや東京音楽コンクール、オISTRAフ国際コンクールなど数々のコンクールで優勝や入賞の実績を持つ。出光音楽賞、青山音楽新人賞を受賞。12歳での日本の主要楽団との共演を皮切りに、パリ管、フランス国立管、シュトゥットガルト室内管など国内外の楽団と多数共演。東京音楽大学特別特待奨学生としてアーティスト・ディプロマコースを修了し、現在は江副記念リクルート財団奨学生としてメニューイン国際音楽アカデミーにて研鑽を積む。テレビ朝日「題名のない音楽会」、NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」などのメディアにも多数出演。使用楽器はNPO法人イエローエンジェルより貸与の1678年製ニコロ・アマティ。



©Yuji Hori

チェロ

遠藤真理 (読響ソロ)

MARI ENDO, (YNSO Solo) Cello

4/23
土曜マチネー

4/24
日曜マチネー

Artist

4/23
土曜マチネー

4/24
日曜マチネー

Artist

4/23

土曜マチネー

4/24

日曜マチネー

Artist



©Hiromi Uchida

ピアノ

小林亜矢乃

AYANO KOBAYASHI, Piano

優美な音色で魅了するピアノの名花。桐朋学園「子供のための音楽教室」を経て、東京音楽大学ピアノ演奏家コースに特待生で入学、首席で卒業。ケルン音楽院を首席で卒業。日本音楽コンクール入選、カラブリア国際コンクール第2位、エンニオ・ポリーノ国際コンクール第3位など入賞多数。これまでにネザールランド・フィル、チェコ・フィル、ハンガリー国立フィル、東京響、日本フィル、名古屋フィル、大阪フィルなど国内外の楽団と共演している。2019年5月にはブダペストで開催された日本・ハンガリー国交樹立150周年記念コンサートでブダペスト響と共演し、好評を博した。ドイツでのリサイタルや、スペインのセビリア・スプリングフェスティバルに招かれるなど国際的にも活躍。



©タクミジュン

ソプラノ

森谷真理

MARI MORIYA, Soprano

圧倒的な表現力と美しく力強い声で世界を魅了する“ディーヴァ”。武蔵野音楽大学、同大学院卒業後、ニューヨークに留学し、マネス音楽院プロフェッショナル・スタディーズ修了。世界各地のコンクールにて優勝、受賞歴多数。欧米ではメトロポリタン歌劇場にて2006年に〈魔笛〉夜の女王で大成功を収めたのをはじめ、シアトル・オペラ、リンツ州立劇場、ウィーン・フォルクスオーパーなど多数の歌劇場で活躍。国内では、日生劇場〈ランメルモールのルチア〉、二期会〈蝶々夫人〉〈サロメ〉〈ルル〉の表題役等を演じ、絶賛を博す。国内外の著名指揮者および主要オーケストラとの共演も多い。19年には「天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典」で国歌独唱を務めた。小山評定ふるさと大使。とちぎ未来大使。下総院一音楽賞受賞。名古屋音楽大学准教授、東京芸術大学、洗足学園音楽大学非常勤講師。

5/19

名曲

Artist

抜群のテクニックと輝かしくのびやかな音色で聴衆を魅了する、読響が誇る首席フルート奏者。ブルガリアのソフィア生まれ。ブルガリア国内のコンクールをはじめ、クーラウ国際フルート・コンクールなどで入賞。1998年から2005年までドイツのフィルハーモニー・デア・ナツィオーネンの首席フルート奏者、05年から17年まではマレーシア・フィルの首席フルート奏者として活躍した。また、西オーストラリア響やオーケストラ・アンサンブル金沢、日本センチュリー響などで客演首席奏者も務めた。ソリストとしてモーツァルト、C.P.E. バッハ、メルカダンテ、テレマンの協奏曲をマレーシア・フィルなどと共演したほか、リサイタルや室内楽でも活動。これまでにゲオルギ・スバソフ、ロバート・ウィンに師事。18年から読響首席フルート奏者を務め、数多くの名演奏を披露している。



©読響

フルート

フリスト・ドブリノヴ

(読響首席)

HRISTO DOBRINOV,
(YNSO Principal) Flute

数々の録音で高い評価を得ているドイツの名手が読響初登場。芸術性の高い演奏でメンデルスゾーンの傑作協奏曲の神髄に迫る。

ミュンヘン生まれ。モーツァルテウム音楽院で研鑽を積んだ後に、1999年にレオポルト・モーツァルト国際コンクールで優勝、聴衆賞などを併せて受賞。以降、ベルリン・コンツェルトハウス管、MDR 響、ベルギー国立管に招かれ、第一線の指揮者と共演。2010年にシューマンのヴァイオリンと管弦楽のための作品全集をリリースし、以後、名門ヘンスラー・レーベル等からCDを多数リリース。音楽専門誌などで高い評価を受け、ICMA 賞、ピッツィカート誌のスーパーソニック賞などを受賞。16年秋よりミュンヘン音楽・演劇大学教授。使用楽器は1743年製L. グァダニーニ、2015年製のフィリップ・アウグスティン。



©Denise Krentz

ヴァイオリン

レナ・ノイダウアー

LENA NEUDAUER, Violin

5/24

定期

Artist

5/28

土曜マチネー

5/29

日曜マチネー

6/1

大阪定期

Artist

ベートーヴェン

三重協奏曲 八長調 作品56

4/23
土曜マチネー

4/24
日曜マチネー

Program Notes

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が作曲した協奏曲のなかでもひととき異彩を放っているのが、この三重協奏曲。ピアノ、ヴァイオリン、チェロの3人ものソリストを要する珍しい編成を持つ。作曲の経緯は明らかではない。18世紀後半までパリでは協奏交響曲(サンフォニー・コンセルタント)の名で複数の独奏楽器による協奏曲が人気を獲得していた。ベートーヴェンは1802年、パリで活躍していた旧友のアントン・ライヒャがウィーンにやってきた際に、彼との会話から複数楽器による協奏曲のアイデアを思いついたのかもしれない。もっとも、この三重協奏曲は3人のソリストが妙技を競い合うというよりは、ピアノ・トリオとオーケストラのための協奏曲とみなしたほうが納得がゆく。トリオのなかでもチェロがリーダー格を務めているのが特徴的だ。

ベートーヴェンの伝記作者シンドラーによれば、ピアノにはベートーヴェンのパトロンであり弟子でもあったルドルフ大公、ヴァイオリンにはカール・アウグスト・ザイドラー、チェロには当代一流の名手アントン・クラフトが想定されていたというが、この記述は^{しんぴょうせい}信憑性に乏しい。作曲は交響曲第3番〈英雄〉と同時期。1804年に〈英雄〉とともにパトロンのロブコヴィッツ邸で試演されるも、出版の遅れなどもあり、1808年に公開初演された。

第1楽章 アレグロ 雄大で力強い提示部に続いて、チェロ、ヴァイオリン、ピアノの順で独奏楽器が登場し、風格のある楽想がくりひろげられる。

第2楽章 ラルゴ わずか53小節のみの間奏曲的な楽章。独奏チェロの伸びやかで叙情的な主題に弦楽合奏が静かに寄り添う。切れ目なく第3楽章へと続く。

第3楽章 ロンド・アラ・ポラッカ ポラッカとはポロネーズのこと。独奏チェロによるロンド主題で始まり、入念で高揚感あふれるクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1804年／初演：1808年5月、アウガルテン、ウィーン／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ

4/23

土曜マチネー

4/24

日曜マチネー

Program Notes

ベルリオーズ

幻想交響曲 作品14

1827年、イギリスの劇団による「ハムレット」を観劇したエクトール・ベルリオーズ(1803～69)は、シェイクスピア作品の崇高さに胸を打たれるとともに、舞台女優のハリエット・スミッソンに熱い思いを燃えあがらせた。「彼女の演劇の才能がもたらす深い感銘は、シェイクスピアが与える衝撃にも匹敵する」。女優に理想化されたヒロイン像を見たベルリオーズは熱心に彼女を追いかけて続けた。やがて充たされぬ思いが苦しみへと変わると、作曲家は苦悩を芸術へと昇華させるかのように自伝的作品〈幻想交響曲〉を書きあげた。副題は「ある芸術家の生涯のエピソード」。鋭敏な感受性と豊かな想像力にあふれた若き芸術家が、恋に絶望してアヘンで服毒自殺を図るものの死には至らず、奇怪な幻覚を見るといった筋立てを持つ。

同時期にベルリオーズを触発したのは、アブネック指揮パリ音楽院演奏協会によるベートーヴェンの交響曲演奏会である。「ベートーヴェンは、シェイクスピアが詩の新しい宇宙を見せたように、新たな音楽の世界を開いてくれた」。ベルリオーズの関心は、オペラやカンタータなどの声楽曲から、器楽曲の分野に向けて広げられることになった。失恋体験とベートーヴェン体験の両者がこの〈幻想交響曲〉に結実したといえるだろう。

第1楽章 “夢と情熱” 序奏に続く主部で、恋人を表す主題がフルートとヴァイオリンで奏でられる。この主題は形を変えてくりかえし登場する。**第2楽章 “舞踏会”** ハープが活躍する華やかなワルツ。芸術家は舞踏会に集う人々に恋人の姿を探す。**第3楽章 “野の情景”** イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが羊飼いの笛の二重奏を吹く。ティンパニが遠雷を表現する。**第4楽章 “断頭台への行進”** 恋人を殺して死刑を宣告された芸術家は断頭台にのぼる。**第5楽章 “ワルブルギスの夜の夢”** ^{まがまが} 禍々しい魔女の夜宴。醜い姿に変わり果てた恋人がやってくる。^{とろろ} 吊いの鐘が鳴り、「怒りの日」の主題があらわれる。乱痴気騒ぎがくりひろげられ、壮絶なフィナーレを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1830年／初演：1830年12月5日、パリ／演奏時間：約55分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、ハープ2、バンダ（オーボエ、鐘）、弦五部

ヴォーン＝ウィリアムズ

タリスの主題による幻想曲

レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ(1872～1958)は、ロンドンとケンブリッジで音楽を学び、その後、ベルリンとパリとで作曲の研鑽を積んでロンドンに戻った。そのとき、土産代わりに持ち帰った想いがある。外国の手本をなぞるのではなく、自国の音楽資源を生き返らせて用いることこそ、自らの創作の中心課題だ、という自覚だ。

この自覚に基づいて作曲家は、イギリスの民謡やエリザベス朝・ジェイムズ朝(1558～1625)の音楽を研究し、自作に取り込んでいくことになる。こうした姿勢と、自身の個性との最初の優れた結晶が〈タリスの主題による幻想曲〉だった。

ヴォーン＝ウィリアムズはスリー・クワイアーズ音楽祭に出展するため、1910年にこの作品を書き上げる。同年の初演後、13年に改訂をおこない、19年に最終稿を仕上げた。

タイトルに名の挙がるトマス・タリス(1505～85)はエリザベス朝の作曲家。ヴォーン＝ウィリアムズは、タリスの〈9つの詩篇歌〉(1567年出版)の第3曲にあたる「なぜ異邦人は騒ぎ立ち」(詩篇第2篇)を引用して、〈幻想曲〉の変奏主題とした。

作曲家は曲中、この主題をそのまま示すこともあるが、多くの場合は細切れにして用い、そこからさまざまな旋律のヴァリエーションを引き出している。作品世界の変わり目となるのは第79小節からの息の長いメロディー。これを独奏群が受け渡ししながら、徐々にクライマックスを作り出していく。

この作品のもっとも大きな特徴はその編成にある。大弦楽合奏、小弦楽合奏(2・2・2・2・1の弦5部)、弦楽四重奏からなる大中小3つの音響群が^{ていりつ}鼎立しているのだ。この音響群相互の距離を工夫することで、サウンドの広がる空間の大きさを調節することができる。各群が応答しあう曲の作りや、初演時の配置に鑑みれば、それぞれはなるべく離して配置するのが望ましい。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1910年(13年改訂、19年再改訂)／初演：1910年9月6日、イギリス・グロスター／演奏時間：約15分

楽器編成／弦五部(複数群)

5/19

名曲

Program Notes

尾高尚忠

フルート小協奏曲 作品 30a

「日本のベートーヴェンになってやる！」

尾高尚忠（1911～51）はそう心に誓って日本を出た。1931年、20歳のときだった。向かった先はウィーン。一時帰国を挟み、40年まで同地で作曲を学ぶ。帰国後、新交響楽団（のちの日本交響楽団、NHK交響楽団の前身）の専任指揮者となり、多忙な舞台生活を送る。みづから「強行軍的」と呼んだ公演頻度が仇となり、51年に急逝した。

戦中・戦後の時代を指揮者として駆け抜けた尾高だが、「日本のベートーヴェン」になるという誓いを忘れてはいなかった。在欧中から継続して作曲に取り組み、40年代中盤にはオーケストラ作品を集中的に生み出す。その最後の完成作品が、フルート小協奏曲 作品 30a である。

作曲は47年1月半ばから3月にかけて。同じ年の初秋にフルートの森正と、尾高自身の指揮する日本交響楽団が放送初演した（東京放送局〔JOAK〕）。作曲家はのちに、弦楽パートの演奏の困難さを軽減するため作品の改訂に取り掛かり、併せて編成を拡大した（フルート協奏曲 作品 30b 未完）。

ただし尾高はこの改訂を、「余程の必要がない限り、それは甚だ危険」と見做していた。その点からすると、フルート小協奏曲 作品 30a の形のほうが、作曲家の描いた作品世界をいっそう鮮明に映し出していると言ってよい。実際、尾高自身は作曲当時、作品 30a を指して「シャレたつもり」と述べ、同作を掌中の珠のように可愛がっていたという。

第1楽章はフルートの即興的な楽句で始まる。それが徐々に形を整えていき、やがて幾分か据わりのよいメロディーに到達する。作曲家の論理的な構成への好みがかがえる。**第2楽章**は3つの要素をシンメトリー（ABCBA）の形で示す。この書法にも構成を重視する尾高の姿勢がにじむ。**第3楽章**へは間をおかずに入る。7・3・4拍子の入り混じった変拍子の主題が、無窮動の運びにアクセントをつける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1947年／初演：1947年9月3日、放送初演（東京放送局）／演奏時間：約18分
楽器編成／ホルン2、ハープ、弦五部、独奏フルート

チャイコフスキー

交響曲 第5番 木短調 作品 64

他人の手助けが創作の契機となる。往々にしてあることだ。交響曲第5番に取り組む直前、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、まず聴衆に、次にバラキレフに、最後にベルリオーズに助けられた。

交響曲第4番やヴァイオリン協奏曲を書き上げた78年以降、作曲家は満足いく水準の管弦楽曲を生み出せずにいた。さまざまな事情でふさぎ込むチャイコフスキーを鼓舞したのは、聴き手の拍手だった。84年末にオペラ〈エフゲニー・オネーギン〉のサンクトペテルブルク公演を成功させたことで、気持ちがあがった。

ロシア楽壇の指導者バラキレフとの交流を再開したことも、作曲家によい影響を与える。バラキレフの提案に基づき、チャイコフスキーは交響曲〈マンフレッド〉（85年）を書き上げた。この作業で鍵となったのが、ベルリオーズの諸作品である。バラキレフは〈マンフレッド〉を提案する際、ベルリオーズのさまざまな書法をチャイコフスキーに示していた。

こうして第5交響曲への準備が、作曲家の心中に調う。チャイコフスキーはみづからの〈マンフレッド〉を下敷きに、ということはすなわち、ベルリオーズの作品を模範として、第5番の構想を練り上げた。テーマの循環によって4つの楽章を統合しているのだ。これはベルリオーズの固定楽想（イデー・フィクス）に非常に近い。

第1楽章、冒頭8小節の主題が以後、作品全体を結びつけるかすがい（固定楽想）となる。主部に入るとこの主題は姿を消し、新たなテーマが登場する。

第2楽章では再現部の始めとコーダへの転換点とにフォルティッシモで固定楽想が現れる。

第3楽章はワルツ。終結部分の前にピアノッシモでイデー・フィクスを回想する。

第4楽章では、固定楽想を長調に移旋してロンド主題のように扱う。楽章の終局では第1楽章主部の“新たなテーマ”を再現。楽想の二重回帰を成し遂げて作品を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1888年／初演：1888年11月17日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ウェーベルン

6つの小品 作品6 (1928年版)

ウィーン生まれのアントン・ウェーベルン (1883～1945) は、師のアルノルト・シェーンベルク (1874～1951)、同門のアルバン・ベルク (1885～1935) とともに新ウィーン楽派の一翼を担う作曲家である。後期ロマン派の作風から極小形式 (ミニアチュール) の無調へと進み、その弱音と音色の微細なニュアンスの音楽から「ピアノニッシモ・エスプレッシーヴォの作曲家」と呼ばれた。1924年から師に倣^{なら}って12音技法による作品を手がけ、同時代のみならず第二次世界大戦後の前衛作曲家たちにも多大な影響を与えた。

シェーンベルクに続いて無調の世界に入ったウェーベルンは、1909年の歌曲と弦楽四重曲で新しい方向を探り、翌年〈オーケストラのための6つの小品〉でその書法が確立された。主題を持たない極めて短い楽曲のなかで、ウェーベルンの関心は音色に向けられた。音色を音楽の構成上のひとつの要素とみなし、シェーンベルクが〈オーケストラのための5つの小品〉(1909) 第3曲「色彩」で実施した音色旋律の手法 (旋律を構成する個々の音を様々な楽器で受け渡していく) を用いた。6曲それぞれ楽器編成が異なり、テンポの変化が激しい第2曲以外はゆっくりと進められ、最も長い第4曲「葬送行進曲」でも41小節 (1910年版)。それ以外は11～27小節で、凝縮された密度の高い作品となった。初演は、1913年にシェーンベルクの指揮で行われた。

その後、1928年、ウェーベルンはオーケストラの規模を2管編成に縮小、整理した版を作り、速度標語等も改め、シェーンベルクに献呈した。タイトルは付していないが、33年に各曲について次のように記している。「第1曲：カタストロフの予感、第2曲：その成就、第3曲：微妙なコントラスト、第4曲：葬送行進曲、第5曲と第6曲：エピローグ、追憶と諦念」。本日は、2管編成版による演奏である。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1910年、1928年 (2管編成版) / 初演：1913年3月31日、ウィーン / 演奏時間：約13分
楽器編成 / フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器 (グロッケンシュピール、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、太太鼓、小太鼓、銅鑼、鐘)、ハープ、チェレスタ、弦五部

ベルク

歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章

ベルクは、その生涯に二つのオペラ〈ヴォツェック〉と〈ルル〉（一部未完成）を書いた。いずれも今もなお世界の歌劇場で上演される、20世紀を代表する作品である。

〈ヴォツェック〉は、1914年に着手された。オペラの題材を探していたベルクは、19世紀ドイツの作家ビュヒナーの戯曲『ヴォイツェック』の上演を観てオペラ化を思いつく。貧しい兵卒ヴォツェックが痴情のもつれから起こす殺人。戯曲をもとに15場から成る台本を作成し、5場ずつまとめた3幕のオペラが構想された。ベルク自身も第一次世界大戦で徴兵され、短期間ながら軍隊生活の体験もオペラに生かされた。

しかし、1922年に全曲は完成したものの上演の目途が立たない。いくつかの歌劇場に断られたため、ベルクはピアノ・スコアを自費制作し、作品を売り込んだ。実際、試演までこぎつけた劇場もあったが、上演には至らなかった。そこで、指揮者シェルヘンの助言もあり、まずはオペラ全体に関心を向けてもらおうと、3つの断章としてソプラノ独唱を伴う演奏会用組曲にみずから編曲した。

この組曲では、ヴォツェックを裏切り、鼓手長と浮気するマリーにスポットを当て、彼女の心情を通してこの救いようのない悲劇が描かれる。

第1曲：第1幕 第2場&第3場 静かな美しい音楽に続いて、行進曲とともに軍楽隊を引き連れた鼓手長が現れる。マリーは窓辺から目で合図を送り、子供を寝かしつけるために子守唄を歌う。**第2曲：第3幕 第1場** マリーは、聖書を読みながらみずからの罪を悔いている。主題と七つの変奏、二重フーガで作られ、シュブレヒシュティンメ（語りと歌の中間の形態）と歌が交替する。**第3曲：第3幕 第4場&第5場** ヴォツェックはマリーを殺した現場に戻り、凶器のナイフを沼に捨てようとして溺れてしまう。死体があがったことを子供たちが聞きつけ、見に行こうとするが、マリーの子供は事情が飲み込めない。木馬で遊ぶ子供の様子で幕となる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1914～1922年（オペラ全曲）、1924年（組曲編曲）／初演：1924年6月15日、フランクフルト／演奏時間：約20分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、銅鑼、シロフォン、鞭）、ハープ、チェレスタ、弦五部

〈ヴォツェック〉から3つの断章 歌詞対訳

訳：長木誠司

I：Marsch

MARIE

Soldaten, Soldaten sind schöne Burschen!

Wiegenlied

MARIE

Komm, mein Bub! Was die Leute wollen!

Bist nur ein arm' Hurenkind

und machst Deiner Mutter doch so viel Freud'

mit Deinem unehrlichen Gesicht! Eia popeia...

Mädel, was fangst Du jetzt an?

Hast ein klein Kind und kein Mann!

Ei, was frag' ich darnach,

Sing' ich die ganze Nacht:

Eia popeia, mein süßer Bu', Gibt mir kein

Mensch nix dazu!

Hansel, spann' Deine sechs Schimmel an,

Gib sie zu fressen auf's neu —

Kein Haber fresse sie, Kein Wasser saufe sie,

Lauter kühle Wein muß es sein!

Lauter kühle Wein muß es sein!

II：Variationen

MARIE

„Und ist kein Betrug in seinem Munde

erfunden worden“ ...

Herr Gott, Herr Gott! Sieh' mich nicht an!

„Aber die Pharisäer brachten ein Weib zu

ihm, so im Ehebruch lebte.“

„Jesus aber sprach: So verdamme ich dich

auch nicht,

geh' hin, und sündige hinfort nicht mehr.“

Herr Gott! Der Bub' gibt mir einen Stich in's

Herz. Fort!

Das brüst' sich in der Sonne!

Nein, komm, komm her! Komm zu mir!

„Es war einmal ein armes Kind und hatt'

keinen Vater und keine Mutter ... war Alles tot

und war Niemand auf der Welt, und es hat

gehungert und geweint Tag und Nacht. Und

weil es Niemand mehr hatt' auf der Welt ...“

Der Franz ist nit kommen, gestern nit, heut' nit ...

Wie steht es geschrieben von der Magdalena?

„Und kniete hin zu seinen Füßen und weinte

und küßte seine Füße und netzte sie mit

Tränen und salbte sie mit Salben ...“

Heiland! Ich möchte Dir die Füße salben —

Heiland! Du hast Dich ihrer erbarmt,

erbarme Dich auch meiner! ...

I：行進曲

マリー

兵隊さ〜ん、兵隊さ〜ん みんな色男だねえ!

子守歌

マリー

おいで、坊や! 好き勝手言わせておきな!

お前が可哀想なてなし子だとしても

母さんはとても嬉しいんだよ

お前の罪深い顔を見ていてもね! ねんねだよ...

娘さん、さあどうするの?

お父のいない子を産んで!

あら、何の気にすることがありましょう、

夜通し歌ってあげるのよ——

ねんねんころり、可愛い坊や、誰の施しも受け

やせぬ!

坊や、馬車に白馬6頭を、

繋いででもいちど餌おやり——

燕麦ではいけないよ、ただの水でもいけないよ、

冷えたぶどう酒おやりなさい!

冷えたぶどう酒おやりなさい!

II：変奏曲

マリー

「しかしてそのことばには偽りなかりき…」

「神様、神様! 私を見ないで!」

「しかしパリサイびとら、姦淫に生ける女を

イエスのもとへ連れ来たり」

「だがイエス言い給う——我、汝をも罰せじ、

往け、そして再び罪を犯すまじ!」

神様! 坊やを見ると心が痛むわ。あっちに行

って!

何よ、偉そうな顔をして!

いいえ、おいで、おいで、こっちにおいで!

「むかしむかし可哀想な子供がおりました、父さ

んも母さんもおりました…みんな死んで、

この世に誰もいませんでした。お腹が空いて、

昼も夜も泣いておりました。もう、この世に誰

もいなかったの…」

フランツが来ない、昨日も今日も…

マグダラのマリアのことは何と書いてあるかしら?

「おみ足に 跪き、そして泣きながらおみ足に接

吻し、そして涙にて濡らし、そして香油を塗り…」

主よ! 私香油を塗ろうございます——

主よ! あの女を憐れむのなら、

私のことも憐れんでくださいます!...

※ページをめくる音にご注意ください。

III : Abschluß

MARIENS KNABE auf einem Steckenpferd reitend
Ringel,ringel, Rosenkranz, ringel reih'n!

DIE SPIELENDE KINDE

Ringel,ringel, Rosenkranz, rin...

ANDERE KINDER stürmen herein

EINS VON IHNEN gesprochen

Du, Käthe! ... Die Marie ...

ZWEITES KIND

Was is?

ERSTES KIND

Weisst' es nit? Sie sind schon Alle 'naus.

DRITTES KIND

Du! Deine Mutter ist todt!

MARIENS KNABE

Hopp,hopp! Hopp,hopp! Hopp,hopp!

ZWEITES KIND

Wo is sie denn?

ERSTES KIND

Draus liegt sie, am Weg, neben dem Teich.

DRITTES KIND

Kommt, anschau!

ALLE KINDER laufen davon.

MARIENS KNABE

Hopp,hopp! Hopp,hopp! Hopp,hopp!

(allein) zögert einen Augenblick und reitet dann
den andern Kindern nach.
Leere Bühne

III : 終場

マリーの子供 (春駒でお馬ごっこをしながら)
ぐるぐるまーわれ

遊んでいる子供たち

ぐるぐるまーわれ

(ほかの子供たちが駆け込んでくる)

そのなかのひとり (語りで)

おい、知ってるかい? マリーが...

第2の子供

なんだい?

第1の子供

知らないんだ。もう大騒ぎだよ。

第3の子供 (マリーの子供に)

ねえ、君のママが死んでるよ!

マリーの子供

はいよー! はいよー! はいよー!

第2の子供

どこで死んでるのさ?

第1の子供

あっちだよ、沼のそばの道ばたさ。

第3の子供

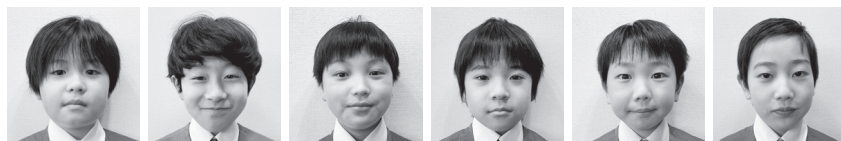
行こう! 見に行こう!

すべての子供 (駆け去る)

マリーの子供

はいよー! はいよー! はいよー!

(ひとり残され、しばらく躊躇ってお馬ごっこを
しているが、やがてみんなのあとを追いかけていく)
(舞台はからになる)



神谷 文

関根佳都

佐藤友希

田中碧琉

福田莉久

齋藤 紘

TOKYO FM 少年合唱団 1985年、FM東京の開局15周年を記念して誕生。ボーイソプラノならではの純粋な響きを追求し、小学生の男の子だけをメンバーとする世界でも稀少な少年合唱団。「定期演奏会」等の主催公演には、第一線で活躍する指揮者や演奏家をゲストに迎え、意欲的なプログラムに取り組む。国内外のオペラハウスやオーケストラからの出演依頼も多く、著名な音楽家と共演する貴重な機会を得ている。また、様々なアーティストのCD録音や映画・ドラマ・CM音楽の録音に参加するなど、その活動は多岐にわたる。 指導：米屋恵子、伊藤邦恵

ツェムリンスキー

交響詩〈人魚姫〉

アレクサンダー・フォン・ツェムリンスキー (1871~1942) は、マーラーに才能を認められ、ウィーンのフォルクスオーパーや宮廷歌劇場等の指揮者を歴任した非凡で多才な音楽家だった。1904年に弟子のシェーンベルクとともに、新しい音楽の創造を目指して「創造的音楽家協会」を立ち上げ、交響詩〈人魚姫〉は、シェーンベルクの交響詩〈ペレアスとメリザンド〉とともに、翌年の第4回演奏会で初演された。その後もベルリンやプラハで演奏された記録は残るが、それ以後、楽譜の所在は不明となり、長らく忘れ去られていた。この作品に再び光が当たるのは、1974年のシェーンベルク生誕100年をきっかけに、ツェムリンスキーへの再評価と研究が開始されてからだ。調査の結果、第1楽章の楽譜はウィーンで、第2、第3楽章はワシントン(1938年にアメリカに亡命した)で発見され、84年にペーター・ギュルケ指揮のオーストリア・ユース・フィルハーモニーで蘇演された。

〈人魚姫〉は、アンデルセンの同名の童話に基づくオーケストラのためのファンタジーである。ツェムリンスキーの高度な描写力によって、物語が丁寧に描かれる。**第1楽章** (きわめて適度に活発に) 深い海の底を思わせる主題が弱音で始まり、ヴァイオリン独奏が哀しげな人魚姫の主題を奏でる。音楽は力強さを増し、ヴァイオリン独奏とチェロ独奏の優しい二重奏は人魚姫の姉妹の対話である。嵐の場面では暗く激しい海の主題がうねりを上げ、王子の船に襲いかかる。人魚姫は、難破船から王子を救い出し、恋心を抱く。**第2楽章** (大きく動いて、ざわめくように) 海の魔女との取り引きで声を失った人魚姫は、人間界を夢見る。ワーグナー風のドラマティックな表現もみられるなか、美しいワルツで彩られた王子の結婚式に悲しみがこみ上げる。**第3楽章** (苦悩に満ちた表現で、広大に) 消えゆくような音楽に続いて、人魚姫の主題が現れる。主題は変容され、弦楽器とハープによる美しい音楽の後、海の主題が現れ、海底に身を投げた人魚姫が暗示される。最後は、結婚式の音楽が現れた後、海の泡へと静かに消えていく。〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1902~1903年／初演：1905年1月25日、ウィーン／演奏時間：約46分

楽器編成／フルート4 (ピッコロ2持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン6、トランペット3、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、鐘)、ハープ2、弦五部

5/28

土曜マチネー

5/29

日曜マチネー

6/1

大阪定期

Program Notes

メンデルスゾーン

序曲〈ルイ・ブラス〉 作品 95

ドイツ初期ロマン派を牽引した作曲家の一人、フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）が、フランスの文豪ヴィクトル・ユーゴーの戯曲〈ルイ・ブラス〉の上演用にした序曲。38年に作られた同戯曲が、翌39年ライプツィヒで慈善興行される際、当地の俳優養老年金委員会からの依頼で作曲され、同年3月、戯曲の序曲として初演された。ちなみにこれは、メンデルスゾーンがヴァイオリン協奏曲木短調を書き始めた時期にあたる。

戯曲自体は16世紀のスペインが舞台。「王妃の侍女に手を出したことで王室を追放され、王妃に恨みを抱くドン・サリュスト侯爵が、部下で平民のルイ・ブラスを貴族ドン・セザールと偽って王妃に近づけ、不倫の罪に陥れようと画策した。しかしルイは王妃と相思相愛の仲に。そしてルイは王妃を守るために侯爵を殺し、自らも死を選ぶが、王妃は彼の偽りを許し、愛を告げる」といった物語である。

メンデルスゾーンは物語を気に入らず、依頼者の態度も不快だったので、反抗心からこの序曲を異例の短期間（3日との記述もある）で仕上げ、悲劇にそぐわぬ華やかな終わり方にしたともいわれている。なお、同戯曲関連では、二重唱曲〈ルイ・ブラスからの口マンズ〉作品 77-3も残されている。

曲は、レント～アレグロ・モルト。ハ短調を基調とした、メンデルスゾーンには稀なほど劇的な音楽だ。管楽器によるファンファーレ風のコーラル（レントの部分）で荘重に始まり、弦楽器による速い動き（アレグロ・モルトの部分）が続く。両者が交互に現れ、3回目のコーラルから快速部分に移ると、細かく動くシリアスな第1主題が登場、激しい頂点が築かれる。4回目のコーラルの後、中低音で奏される流麗な第2主題、明るく軽快に弾む第3主題が提示され、3つの主題が交替しながら力強い展開を遂げていく。5回目のコーラルの後にはハ長調に変わり、華やかに結ばれる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1839年／初演：1839年3月11日、ライプツィヒ／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 木短調 作品 64

メンデルスゾーンが、短い生涯における円熟期に完成した代表作。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの諸作と並ぶ人気ヴァイオリン協奏曲である。

メンデルスゾーンは1838年、常任指揮者を務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターで友人のフェルディナント・ダーヴィトのために構想を開始した。しかし創作は難航し、ダーヴィトの助言を仰ぎながら、1844年にようやく完成。翌年3月、ダーヴィトの独奏、病氣療養中の作曲者に代わるニルス・ゲーゼの指揮により初演された。

本作の主な特徴は、まず木短調の調性（前記3人の曲はヴァイオリンがよく響く二長調）、そして全楽章が切れ目なく演奏される点と、従来は第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者任せだったカデンツァが、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にある。雰囲気^{かんじ}の継続と一貫した曲調を企図したこれらの発想は、当時のヴァイオリン協奏曲としては革新的だった。

曲は、古典的な均整美と甘美なロマンティシズムが溶け合った名品。優美でありながらも憂いや力強さを併せ持ち、何より旋律の美しさは比類がない。また独奏はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露する。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッシオナート 管弦楽による主題提示部がなく、独奏が2小節目から登場する点も斬新。そこで弾かれる有名な第1主題と、木管が出す穏やかな第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で次楽章へ移る。**第2楽章** アンダンテ 叙情的な歌が流れゆくハ長調の緩徐楽章。中間部は短調に変わり、荘重な趣きが漂う。**第3楽章** アレグレット・ノン・トロツポ～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 短い経過部から2つの主題を軸にした木長調の主部へ移り、華やかな音楽がテンポよく繰り広げられる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1838～44年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

5/28

土曜マチネー

5/29

日曜マチネー

6/1

大阪定期

Program Notes

5/28

土曜マチネー

5/29

日曜マチネー

6/1

大阪定期

Program Notes

チャイコフスキー

交響曲第6番 口短調 作品74 〈悲愴〉

ロシアの大家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー (1840～93) 最後の作品にして、古今の交響曲の中でも上位の人気を誇る1曲。1892年末に着想後、93年に入って本格的に着手され、同年8月末に完成。10月28日、作曲者の指揮によりペテルブルクで初演された。ところが彼は11月2日にコレラを発症し、4日後の6日に世を去った。

こうした経緯とアダージェョ・ラメントーソ (悲しく、悼んで) のフィナーレに象徴される曲の悲劇性が相まって、「死を予感した作品」や「自殺に至った作品」との見方がなされることになり、20世紀後半にはある音楽学者が出した「同性愛醜聞の隠匿のため、秘密会議にて自殺を強要された」との見解が定説になりかけたこともある (現在、死因は病氣説が主流)。

曲自体はやはり悲愴感が強く、特にフェルマータの付いた休符で消えていく終結は、人生の最期を想起させなくもない。ただし、当時の交響曲では異例の第4楽章のみならず、曲調が激変する第1楽章、珍しい5/4拍子のワルツの第2楽章、南イタリアの舞曲タランテラのリズムを用いて、スケルツォと行進曲を合体させた第3楽章……と全楽章がユニークな特徴を備えており、見方を変えれば、新機軸を全面的に打ち出した意欲作ともいえる。

第1楽章 アダージェョ～アレグロ・ノン・トロッポ ^{あんうつ} 暗鬱な序奏から、ヴィオラとチェロが第1主題を奏する主部へ移り、激しさを増した後、甘美な第2主題が登場。激烈な爆発に始まる展開部を経て、静かに終結する。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア 変則的なワルツ。2+3拍子の不安定感もあって、どこか暗い影を宿している。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 細かな動きに始まり、ダイナミックな行進曲となって高揚を続ける。

第4楽章 フィナーレ、アダージェョ・ラメントーソ 悲痛な主題を中心とした終曲。中間部は陶酔的でもある。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年10月28日 (ロシア暦16日)、ペテルブルク／演奏時間：約46分
楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、銅鑼)、弦五部